

ポルトガルとモザンビーク革命

ジョン・S・ソール

ブルジョア評論家達は「ゲリラの神話」について独りよがり書き連ねてきた。⁽¹⁾その上、モザンビーク・ゲリラは（アンゴラと独立したギニア・ビザウ共和国の盟友達と共同して）ポルトガル政府を今や打倒してしまったのだからなおのことである。カウ ندا大統領はモザンビーク解放戦線（FRELIMO）議長サモラ・マツケルをザンビアに歓迎し（その地で後者はポルトガルの新外務大臣マリオ・ソアレスとの会談を六月にはじめることになった）、この大陸にサモラに指導されている FRELIMO が存在しなかったならば、ポルトガルは今もって独裁下にあったであろう。この大陸の自由のための戦士がポルトガル人民をも解放したのである」と賞め賛えた。

これは誇大な表現ではなかった。アントニオ・デ・スピノラ將軍（現在では大統領）はその著書「ポルトガルと将来」の冒頭で、ポルトガルは植民地戦争において軍事的勝利を得る望みがないという現実を公然と記している。この固い確信は、アフリカでの残忍にしてかつ有能な（とはいえ、すばらしく成功したとはいえない）司令官として相応な名声を博した人物から出たものであった。加えて、軍事的敗北という恐怖がクーデターそのものの底流にあり、かつポルトガルにおける国軍運動の行動の底流に現在までも流れ続けている主旋律である。

「ポルトガル領アフリカ」の独立闘争は今日でも完全に解決されてはいない。確かに、大きな前進はあった、だがこれ以上に語ることはいかなる確信をもつても困難であろう。最近の小康状態と、これに随伴して今後生じてくる可能性のある広範囲な筋書きには未知のものも相当数ある。この時点では、モザンビークでの進展に影響を及ぼしそうな若干の重要な関数に注目するのが最も賢明であろう。これについてはⅠのなかで考察しよう。ところで、ある関数は他のもの同様に未知である。その最たるものが、FRELIMO 自体であり、その勢力と政治感覚である。実際には、このような現実の故に何ものにもまして、我々はモザンビークにおける闘争継続の展望に自信がもてるのである。私は比較的初期の論文（「FRELIMO とモザンビーク革命」、マンズリー・レビュー誌一九七三年三月号掲載）において運動の統一について分析しておいた。Ⅱでは、一九七二年末のモザンビーク解放区への旅行から得た経験にもとづいて、この前言を補強していきたいと思う。あらゆる事実からみて、私が当時目にした積極的傾向はその後数ヶ月の間にますます強まってきたことは明らかである。

I

クーデター後の本国の情勢とモザンビークにとってのその意義につ

いていえば、五点が考察の対象となるだろう。それを以下簡単に要約してみる。

(1) ポルトガルの首都。ポルトガルのクーデターは多くの対立の所産である。そのうちのあるものは実に根深い。特に経済基盤の変化が重要である。農業に基礎をおいている寡頭的ファシズムの枠のなかで、数は少ないが企業の成長がみられ、当然のことながらそれらは国際資本主義と固く結びついている。ポルトガルの企業（と超国家的企業の経営者）——CUF にとって、シャンパリモード——サラザール主義者ポルトガルの閉鎖的な影の組織は、自らの起した勝利なき植民地戦争と同様に、高価な代償を支払うべき不本位なものとなった。例えば、活力に溢れる労働力を他のヨーロッパ諸国に追い出したが、これが共同市場 (EC) 加盟交渉の障害の源となっている。ヨーロッパの「自由主義的民主主義」に非常に近いものは——これ以外に「責任」ある労働組合運動への展望も含まれている——ポルトガルの多くのブルジョアに、特に企業家や技術官僚に大変好都合であった。サラザールの後継者・カエターノ自身も諸情勢を一般的にこの方向で変革するのに腐心していると伝えられていた。だが、その彼も過去の勢力と未来の勢力との間で虚しく弾き出されていたおのれに気付いていた。

このような傾向は重要な受容しうる要件であるが、これが話しの中でではなかった。このような発展が覚醒させた自由な民族精神は常に完全なまでに当の環境に適合させられてはいなかった。明らかに、国軍運動の多くの構成員（クーデターを起こし、スピノラ將軍を大統領に担ぎ上げた戦闘的集団）は、長年の公然とした権威主義的政治を経験した後だけに選挙の公開と表現の自由、独立した労働組合と非植民地化の公約を単純に信用している。^(二) 新政府内の AMF (国軍運動) 以外のパートナー——例えば共産主義者や社会主義者——は一樣に左翼自由主義的傾向にある。さらに、クーデターによってあからさまな大衆断崖は排除された。その結果、驚くべき程に労働者の活動や要求は共産党やその他の改良主義者がスポークスマンとなって教え込んでき

た成果を凌駕してしまった。明らかに、これらの種々の「進歩的」傾向はクーデターそのものにとっても、またクーデター以後の情勢にとっても決定的であり、また改革要求が骨を粉々にされるような軍事的敗北という付帯事実、アフリカでの残酷な消耗戦のために特に軍人達によって強く要求された。実際には、後の現実——民族解放運動とポルトガル国家との帝国内部での対立の苦々しい産物——こそがポルトガル内部での種々の対立を惹起し、最終的・決定的にバランスを急速に破壊した——上述したように、スピノラ將軍にすら文字という爆弾を投下させる動機ともなった。

それが時期的に非常に早すぎたためにポルトガルの収支決算書に打撃を与えることは出来なかったが、対立は内的発展の方向を超えて動きはじめたことは明らかである——一層厳しい統制と政府主導の自由化を推進する一派（例えばスピノラと資本）と、さらに一層強力な改革に賛成する一派（AMFはこの面では非常に重要である）との意見の対立が存在するにしても。この論争の両翼で飛翔しているのが右翼——現在までのところ全くの沈黙を守っているサラザール体制の後継者達——と左翼の諸勢力である。明らかに、これは一年以内に実施が約束されている選挙によっても結着のつけられるような対立状態ではない。階級間の新たな均衡が確立されるまでにはまだ幾多の紆余曲折があるだろう。

ポルトガルにおいて闘争が継続されるならば、それは必然的にアフリカでうやむやな事態を生みださう。スピノラの著書には、ポルトガルが多くの直接的統制を廃止して現地のアフリカ人將校を通して統治をする、つまり公式的独立というような表面的粉飾を非常に多く盛り込んだ一種の連邦政府の構想が描かれているにすぎない。以上のことやより一層巧妙な種々の新植民地主義的傾向から、現在のポルトガルを支配している自由化分子の多くはその活力を得ていることは疑う余地もない。だから、彼らは国際的非難を柔らげる一方で、アフリカに投下した掛金を獲得するための方法を追求していくだろう。解放

運動との清廉潔白な終結を切望している著名な活動家達ですら（臨時政府の社会主義者・外務大臣でありかつ現在まで解放勢力との中心的な交渉者マリオ・ソアレスを含む）ポルトガルの錯綜した諸目的のために足を引っばられている。このことはギニア・ビザウの PAIGC との間で開催されたロンドン・アルジェ会議さらには FRELIMO とのルサカ会議（五月と六月に開催）からも明らかである。結果的に、かつ必然的に、それは意味もない価値もない連続であった。しかし、ポルトガル側には強調されてしかるべき直接的弱点がある。

FRELIMO との交渉条件についてポルトガルの内部抗争から生まれ出る最終日程がいかなるものであれ、モザンビーク内での時の経過はポルトガルに有利なように静止してはいないだろう。七月末のレポートからみても、軍部は強敵と交渉する以外に方法はないと考えているのは明らかである。あれこれの問題についてポルトガル内部での立場を有利に展開しようとしても、モザンビーク駐留の兵隊は戦闘を拒否している。

(2) ポルトガルの同盟国。ポルトガルの優柔不断な態度と弱点には、南アフリカは驚いたことであろう。これはモザンビークとの利害関係が大きいことからみても明らかである。モザンビークは単なる南アフリカ共和国の労働力の重要な供給源、戦略的投資の対象、必需品の集散地ではなく、自由モザンビークがその解放の流れを「トランスバールから数日を経ないで」注ぎ込むだろうという心配も同様に決定的である。しかも、南アフリカ人の反応は想像される程に平静なものではなかった。南アフリカが既に国境を超えて活動していることは語る必要もない——直接にはローデシアにおいて（ローデシア軍はその代りモザンビークのテテ地区の奥深くで作戦行動をしている）、ポルトガル植民地で公然と述べる程ではないにしても支援活動という形において行動している——なるほど、軍事介入は可能性の域を脱していない。今だに、南アフリカが以上のような行動を採るには欠如しているものがある。白人の人的資源が著しく欠如していることがそれである。しばら

くの間は、破壊活動が日常茶飯事となり、緊張を激化させ、モザンビークでの白色テロの炎を煽り立てるであろう（ジョージ、ジョーダムと共同して。彼は実業家であり現在ではモザンビーク右翼の中心人物であって、ヨハネスブルグのホテルから指令を出している）、恐らくこのような方法を通して、結果的には軍事介入の——情勢不穏を口実にして——アライバイ工作をしているのである。南アフリカの資力は黒人人口のなかで人種的またその他の派閥的傾向を拡大するための謀略には有効なものとなる。これはありうることにように思える。もちろん、南アフリカが時の経過とともに、FRELIMO 政府を相対的に受動的立場に変えたり墮落させようと期待して、それとの共存を最終的に決定することも可能であろう。今一度考えてみよう。FRELIMO の成長とポルトガルのクーデターとの結合は、従来よりも一層劇的な形で、アフリカ南部全体の問題を提起したことは疑いえないであろう。

ポルトガルの体制をこのように暴き出すことにはある種の危険が伴う、にもかかわらず、超国家的企業とヨーロッパ諸政府はクーデターとその後の自由化の方向を基本的に容認するであろう。彼らの利害が、南アフリカのそれとは若干異なるにしても、モザンビークに比べて地下資源（石油、鉄鉱石その他これに類するもの）の豊富なアンゴラにおいてより一層大きいのは事実である。それにもかかわらず、関係諸政府が、FRELIMO の無条件的勝利、解放後のモザンビークの将来とアフリカの南部の遠い未来の基本的意義を無関心のまま見過すことは全く出来ないだろう。我々は西ヨーロッパ陣営内で予想される今後の選択の幅についていかなる幻想ももってはならない。さらに、このような行動のあるものは巧妙にでっち上げられたものである。例えば、NATO 内部において、インド洋での「ソヴェイト海軍の脅威」と長大な海岸線が敵の手に落ちる危険性についていろいろに語られて来た。同様に、「赤の脅威」の神話が闘争継続の各段階で FRELIMO を脅かすことはほぼ間違いないことであろう。右のような理由のために、幸運にして、提案されている一切の西欧軍事介入の用兵学は国家

機関またその他の政策決定者に厳しい困難性をつきつけている。それにもかかわらず、ありふれた帝国主義的主張の巧妙な変型に警戒する必要性は、以前にもまして強調されてしかるべきであろう。

(3) モザンビーク自体。国軍運動の意図が未だ完全にはつきりしていない間に、ポルトガル内外の著名な活動家の利害がモザンビーク内に新植民主義的体制の樹立によってうまく確保されるのは明らかかな事実である。^(三) それ故に、このような新植民主義的な解決の可能性は既に FRELIMO の手で事実上根絶されてしまっていることを了承するのも重要なことである。明らかに、解放運動が解放区に植え込んだ深い根は(これについてはⅡで詳細に考察しよう)この面で意義深く、さらに軍事的優位の継続にとっても劇的な力ともなっている。結局のところ、これがポルトガルの意図を覆えし、日々勝利のニュースをもたらししているマニカやソファラ地区における活動であった。例えば、ザンビア地区(ここでは二千名以上の新兵が、そのうちのある者はポルトガル供与の武器を携帯して直ちに FRELIMO に逃亡してきた)では、最近の武力衝突の勃発、また幹線交通網への攻撃(例えばテテ鉄道へ七月の七四攻撃)がそれである。

これら一連の出来事は、FRELIMO の確固不動のヘゲモニーの最もありふれた証拠の一例にすぎない。最近この国の未解放地区——ここでは FRELIMO は従来内々に活動してきたにすぎない——では、革命という約束に対する大衆の反応は本質的に決定的なものになってきた。新しい何かもつと解放的な雰囲気の及んでいる地区(例えばベイラやロレンソ・マルクでは)では、FRELIMO を支援する大きな動きが起こり、ほとんど全てのジャーナリストは解放運動に向かって流れている世論の力強い動向に一樣に注目していた。GUMO(モザンビーク統一集団は、カエタノ体制の最後の段階で後者の後援を受けて、必要な時と場合には新植民主義の最後の切り札として用いられるために意図的に樹立された組織である)は、モザンビーク内では当然のことながら積極的反應を引き出し得なかった。だから消滅し

ないために FRELIMO の主張に似た調子を徐々に奏で始めてきている。^(四) 白人社会の内部においてすら、ある部分は FRELIMO を母体にした体制の不可避性を認め始めて、これに対処するために植民者の統一回答を作成した。ローデシアでは、このようなことは起りえないだろう。以上のことは、黒人人口のなかに(特に官僚のなかに)潜在的で偏的な分子が欠如していると述べていることでもなければ、また植民者の問題が解決された主張しているものでもない。ある指導的なモザンビークの白人自由主義者は次のように述べた。

サラザール時代の古い機構と未だに存在している卒業生網のなかにいる善意の将校はこの事態に対処出来ないだろう。彼らは古い DGS・ファイルを覗き込むことさえ出来なかった。もし FRELIMO が戦闘を放棄して、市民の政治的自由に立ち戻るならば、彼らは自分達のために用意されている鼠取り機のような場所をみいだすことになる。

ロンドンの「オブザーヴァー」の通信員は、その報告のなかで正当にも次のように結論を下している、「ここで『交渉すべき唯一のこと(五)』はモザンビーク民族主義者への権力委譲の細目だけである。』」という FRELIMO が主張し続けている解答の不可能な論争があります。ここで主要点は、権力委譲が未だに順調に実施されるだろうと思われるという点ではない。FRELIMO——と完全かつ純粹な独立の主張——が今では従来以上にモザンビーク闘争の真の中心である、このことを再び強調することだけである。

(4) 独立アフリカ。アフリカ独立諸国のクワデター以後の新情勢への対応の仕方もまた重要である。モザンビークは、アンゴラという水を濁らせたホールデン・ロバート指導下の FNLA をザイルから支援してきたモブツ將軍の国に沿って不穏な国境線を広げている。だが、モザンビーク闘争において FRELIMO が圧倒的優位を誇っているため、ザンビア当局は解放運動の政治力学のなかで手を汚す危険を敢えて犯さなかった——彼らはアンゴラの場合にはそうしたので

あったが。カウ ندا大統領とタンザニアのニエレレ大統領（両国は今でも FRELIMO の活動にとって重要な活動拠点となっている）は、FRELIMO に「現実的」になり「政治的解決」——停戦を受け入れ、ポルトガルが提案し、かつ監督することになる国民投票を伴う選挙を実施する——の方法を捜すように圧力をかけているという噂がクーデター後一時流れたことがあった。しかし、そのようなことが実際なされたという証拠もなければ、また、ポルトガルの新植民地主義・非 FRELIMO 体制樹立（それは状況をうやむやにし、新植民地主義アフリカの支配階級のなかでより困難な立場にない者がポルトガルとの交渉に入ることを企てさせるものである）を困難にしたという証拠もない。FRELIMO が採用する戦略が如何なるものであれ、アフリカ独立諸国からの支援は時と共に比較的確實なものになって行くように思える。

(5) 支援者。中国やソヴィエト・ブロックからの軍事的・政治的支援は FRELIMO にとっては重要である。また、ロシアと「新生」ポルトガルとの外交関係樹立のような進展が、結果的にみて支援のどの部分を危うくするかは今後の問題であろう。さらに一層直接的な問題は、西欧の同志的サークルからの支援である。不幸にも、ポルトガル領アフリカ植民地の解放運動の海外の支持者は、あたかも闘争が事実上終結してしまつたかの如くに活動するように仕向けられている。これは驚くに価しないだろう。極端なまでのファシズム体制下の残酷かつ明白な植民地主義を非難するのは容易であると思つている自由主義者の多くは、自己の独立闘争への関り合いを、やつとその本性を表し始めたより一層複雑なものへの関り合いに変えて行くことには大きな困難を感じるであろう。ポルトガル内での自由化の促進、植民地内の服従を抵抗なきものに変える努力（種々の新植民地主義的政策を含む）

——これらのものは、スピノラやその他の者が予想しているように、海外からの多くの支援を減少させることになるかもしれない。もし、他方で、闘争の拡大がゲームの別名であるとするならば（例えば、南ア

リカの介入を招来するようなことになれば）、ある者は——ベトナムの傷だらけの生々しい教訓にもかかわらず——採るべき純粋に革命的（レボリューショナリー）方向に加担する危険から身を引くことになるだろう。私が別の箇所（同上）で述べて来たように、モザンビークのような国では、反帝国主義運動の展望への理解と加担という基盤の上に人民を解放の過程の内へ結集することがますます重要になってくるだろう。ポルトガル領アフリカ植民地における解放運動を支援しようとする者の任務は——二重の意味において重要である——ここ数ヶ月間二重に困難となるろう。

II

我々は、FRELIMO のテテ地区防衛主任（で活動的地区書記の）ホセ・モヤネと十六日間生活を共にしながら、モザンビーク内部に七〇マイル入つた——当時ポルトガルが放棄し、ザンビアへは三分の二過ぎたところにあるフィンゴエ・ズンボ道路を横切つて——我々の滞在が終りに近づいた際に、再び彼と会見した。彼は一時間以上にわたつてテテとモザンビーク闘争の全般的な現状を要約して、我々がこの旅行から無数の印象を引き出すのを手伝ってくれた。彼はもちろん我々と一緒になつて、FRELIMO の軍事的優位がマニカやソファラという決定的意味のある地区に拡大していった意義を考えた。その優位は本誌に掲載されたレポート（一九七二年八月・九月掲載）によって確認されただけであつた。今日ではそれが右に考察してきたように、ポルトガル政府転覆の主要な決定要因であつたとみなされている。^(七)分析の明晰さと、我々が FRELIMO の「任務」の典型であると認めるようになったあの感銘深い献身振りとが彼との会談の席でもしばしばみられた。今にして思えば、我々がより個人的問題に立ち戻つた時、我々はモザンビーク革命の意義について一層深い理解に到達していた。

我々が解放区内でインタビューをしたほとんどすべてのモザンビーク人に、現状分析に自分の生い立ちの視点を織りまぜて補うように求めた。モヤネの場合、彼の立場やその生きてきた時代への批判が前

もって知っていたので気乗りしなかった。しかし実施してみた。ところが一旦質問を発すると、彼はこのテーマに夢中になった。彼は我々にその生い立ちを詳細に述べた。特にアフリカ南部の現状やポルトガルの断崖の物凄く様を生々しく描いてみせた。彼は我々がその滞在中に会見した他のどの幹部よりも年長であったから、ポルトガルの存在によってこうむる日常の屈辱とか残酷な行為を数多く経験していた。

だから、無理矢理為すことを余儀なくされた下僕の仕事——南アフリカの一鉱山では、彼よりも以前に働いていた父は死んでいった——経験してきた偏見と権力の乱用、基礎教育の断片を集めての長年の厳しい闘争の様子をこと細かに描写することができた。彼はまた自分の内部で徐々に成長している政治意識、時にはどこかの事件——ガーナのエンクルマ、タンザニアのエエレレ、連邦政府反対闘争、コンゴの独立、アンゴラでの戦闘勃発——やエドアルド・モンドレインの一九六一年の劇的なモザンビーク訪問などによって部分的に火花を散らした政治意識の成長を物語った。彼は孤独からの脱出を求めて、一九六三年モザンビークからタンザニアに逃亡してきた。そして、彼の言葉を引用すれば「FRELIIMOの集団生活に入った」。この言葉で彼は「自分の生い立ち」を締め括った。全く非意識的ではあるが、彼の経歴そのものが FRELIIMO の歴史であり、モザンビーク人民の歴史であると指摘しているように我々には思えた。

モザンビークの将来はこの挿話から読みとることができるだろう。というのはモヤネの結論は精神を反映している——つまり文句的でロマンチックな響きのものをこれ以外の言葉で表現するのは困難であろう——それにもかかわらず、このような話は解放区ではどこにもあるようなものである。私は継続的に幹部と会見した。彼らの非常に多くは二〇代初めであり、FRELIIMO 機構のいろいろな階位に属しているが闘争の本質をしっかりと理解し、一目瞭然たるその献身ぶりには我々は驚いた。私は、多分不公平であろうが、彼らと私が数年来教鞭を採ってきたダル・エス・サラーム大学で顔見知りになった非

常に多くの同世代の保守的學生達とを比較してみたい思いに駆られた。比較をした後で、実践と闘争の場は指導者の訓練にとって理想的な場であると思えた——アフリカのいたる所で見られる植民地時代から継承した数多くの正規の教育制度に比べれば確かにベターである。

驚いたことに、自由モザンビークでの生活には、相互に強く関係し合っている面があった。武装兵士と旅行しながらモザンビークの奥深くの軍事基地に宿泊した時などには、ミリタリズムの危険性——この大陸発展のここ十年間の光に照らしてみればなおのこと——を考えてみないわけにはいかなかった。FRELIIMO も同じようにこの問題、つまりモザンビーク解放以後の社会の性格に関し、この方面から生じてくる危険性について頭を悩ましていたのには興味を覚えた。我々が解放区滞在中一緒に旅行をした FRELIIMO の軍事作戦主任のセバスタン・マボテは我々にあらゆる機会をとらえてこの問題を提起し、アルジェリアの先例や軍政支配下の黒人アフリカ諸国の理解し難い現状を我々と共に話し合った。どこの国をとりあげても、「当局は兵士にその武装している理由を説明してこなかった」、しかるに「我国では政治が軍部に命令を下している」と彼は考えていた。

だからして、全軍人は（明らかに行政職を割り当てられている者をも含めて）軍事訓練を受けていた。また、我々が目撃したことであるが、一般部落民はどの地区においても地区軍隊に積極的に参加していた。加えて、直接、軍の活動に服している者は、彼らもその一部を構成しているモザンビーク全面独立闘争の基本的政治性格を常に想起させられていた。^(八)つまり教育されていた。さらに、幸運にして、我々は軍隊内や運動内の「準備センター」においてこの種の教育的任務に、厳密な意味で携わっている数人の政治局員と会見できた。「独立達成後には」とマボテは我々に確約して続けた、彼が「職業軍人主義」と名付けたものを前提とする「如何なる種類のカーブスト制の樹立に対しても反対運動が続くだろう」と。我々のインタビュした多くの個々の兵士は、「我々が行なっているのは革命であって征服戦争ではない」

というマボテの言葉をいろいろな表現で繰り返した。

後の言葉は殊に重要である。なぜならば、最終的に、モザンビーク解放闘争の職業軍人主義と複雑な官僚主義への抑制こそ、マボテやその他の者にとって、この闘争における活動的・人民的基盤としての存在であると理解されていたから。同様に重要なのは、このような基盤の存在がポルトガルとの闘争において現在までに達成された軍事的成功の鍵でもあった。マボテの言葉を引用すれば「この戦争の原子爆弾は人民の意識である。」、もちろん、モザンビーク内には蓄積されてきた強い人民感情がある。ポルトガルはこれを無視できなかった。この国において我々も参加した大集会の冒頭に、ポルトガル人に虐待されたり窃盗された者、道路工事や南アフリカの鉱山で強制労働をさせられた者、白人の輿（当時はまだ高令白人の幾人かは使用していた）を担いだ者、さらにこの類の者からの糾弾を要求する一種独特の雰囲気がかもしだされた。しかもこのような自由への要求が話の全てではなかった。これ以外にも、農民のポルトガル人への敵愾心に新たな表現形式を与えるための「制度」の重要性と、あの曖昧な感情を再生し急進化して、しかもそれに新たな内容を盛り込む政治的活動方法の重要性とを我々は学んだ。^(九)

以上のように、制度的枠組のなかで、FRELIMOにより生みだされ、部落から発展してきた政治体制の成長を我々はみた。また住民から選挙によって選出された代表者の職務と FRELIMO 任命の将校のそれとがうまく噛合っている部落、サークル、地区や地方における活発な政治生活をも我々はみてきた。確かに、ここに対立の生まれる可能性がある。しかしそれがうまく解決されつつあることも全ての事実から判読できる。このための最も重要な保障となっているものは、我々も出席した運動の公開討論集会において終始、FRELIMO 幹部は人民への尊敬と信頼を基礎にした政治活動と動員計画を前提とすべく大いに努力すべきである、という指摘が彼ら幹部に向けて断えずなされ続けられていた。

インタビュー中にもよく耳にしたことであるが、一般の兵士ですら「人民の支援がなければ、我々は何もできない」と話すのを聞くことは何ら珍しいことではなかった。

殊にある出来事とその現実を計る物差しとなるだろう。我々が滞在した地区司令部から徒歩で数時間の所にある人口三〇〇人程の部落を訪れる時、我々は四〇名以上の男女の武装集団と一緒であった。しかも到着した時温かく歓迎された。さらに兵士は部落民と親しく交歓し、雑役をして手伝いをしたり、また夕食の仕度をしている老母の傍で手持無沙汰にすわったりしていた。兵士の一人（またはたった一人の警官）が到来しても、生活が平常通りに続けられる箇所は世界でも多くないだろう。しかるに解放モザンビークではこれが日常茶飯事である。

解放闘争のある段階で、ゲリラと農民とのこのような関係ができあがることによって得られる利点は明らかである。例えば、武器その他の必需物資の輸送の際には、一般部落民の積極的奉仕はポルトガルとの闘争継続にとって基本的である。また部落民から FRELIMO への農産物の供給の重要性をも我々は確認した。以上のような環境があるために、FRELIMO の運動の大きな安定と新兵の用意周到な常時募集が保障されている。さらにこのことの長期的意義も同様に重大である。つまり、エリートの先入観念への大衆の攻撃そして、あるいは幹部の権威主義的態度の自滅、これと対照的に印象的なのは部落民の自信の回復である。このことは彼らの大衆集会への積極的参加とか、彼らと我々との間の討論の内容のからも明らかである。そのことは、FRELIMO 地区委員に代わって我々に同行することになった部落選出官吏の会話、「私や私の仲間の部落民は、FRELIMO が人民の利害に真に関心を持っていると感じている」という言葉からも端的に読みとることが出来た。「しかし、独立後に現在の情況が基本的に変革されないならば、その時には我々は再び考え、そして行動を起すだろう」とも彼はつけ加えた。FRELIMO の革命路線を支えている確固たる基盤を、人は疑っているのだろうか！。

「革命」という言葉はモザンビーク内で我々がしばしば耳にしたものであった。事実、同志マボテが我々と共にザンビア国境から内陸に向けて出発した際に指摘した第一点は、ポルトガルのような頑強に抵抗している植民地主義に対抗するための動員命令は、他のアフリカ諸国が失ってしまった機会をモザンビーク人に与えた、という点であった。ここでは民族主義者の自己主張は口先ばかりのものに留まりえなかった。しかもそれは必然的に伝統的社会や植民地主義から継承してきた社会諸関係の根本的再構成を含んでいた——手短かにマボテの言葉を引用すれば、それは「革命を起こす機会」を意味した。マボテにとっては「ただ単に敵を倒すだけでは不充分であって、我々はその後の情勢を再構成する準備をしなければならない」。我々は征服する、しかしそれが主要なことではない。むしろ我々は人民の手で完成される社会という思想を掲げて人民の意識をも「征服」しなければならぬ。そして彼は特にエジュアルド・モンドレインがその暗殺の直前に語った、私にとつては初耳の思想を繰り返した。モザンビーク人があまりにも早くポルトガル人を打倒するようなことになれば、それは悲劇的なことであろう、なぜならば闘争の過程の内から数多くの事柄が学びとられていくのだから、と。この言葉をモンドレインやマボテが半ば冗談に語っていることは明らかである。

上述したエリート意識への抑制と人民の自信回復は人民自らが学びとつた教訓の一例であり、解放地区での人民の要求を満たすために教育制度と医療制度拡充のため払われた不撓不屈の努力の成果でもある。我々は学校と病院を訪れた際にその成果を充分に観察した——設備が不十分なものには強い印象を受けたが——、フィンゴエ地区のある部落では、このような施設は長いポルトガル統治下ではみられなかった。

これ以外の成果は新モザンビークでの女性の地位を根本的に改革するという意識的なものであった。これは今始まったばかりで長い時間が必要であろう。しかもこのことは我々と話した FRELIMO の非常に若い女性幹部の言葉から「控え目ではあるが」読みとることができ

た。運動が彼女の人生にもたらした最大の変化は、今では話しをしても相手に聞いてもらえないことです、とその女性は語っていた。確かに、FRELIMO のこの問題への関心は最も目立っていた。我々の出席した大衆集会において、討論の最大の比重は部落民に女性の根本的平等の確立の重要性を考えさせる方向に向けられていた。いみじくも、ポルトガル側から最近逃亡してきた三人の女性が登壇して、FRELIMO に参加して以来経験してきた中で最も驚くべき相異点として運動内部では女性が同僚として待遇されているその様を、のびのびと語っていた。これが人民に「何か新しいものが今創り出されている」と力強く訴えたものである、とある者が語っていた。女性の地位に関する旧来の思想への挑戦は、幅広い文化革命の一端にすぎない。実に印象的であったのは、若い教師の努力であった（その成果は我々のために彼の学校の生徒によって実演された）。それは各地の人々が古来の謡や舞をもとのままに、再現するように奨励することであり、さらに各地の伝統芸術を上手に演じさせることであつた。これが実現すれば、現在のポルトガルの命令に抵抗するための政治的・社会的風よけとなるだろう。なる程、自由モザンビーク内で使用されている革命概念の息吹のあるものは、マボテが FRELIMO 兵士集会でユーモアを混じえながら半ば冗談に語った言葉、「上手に謡えないことは政治的欠点である」という言葉に表現されている。

最終的かつ集中的に、解放区内の経済生活に変化があらわれてきた。「我々は闘争の基盤が経済であることを充分承知している」、さらにマボテは続けて「二つの階級がある、搾取される者とする者である。植民地主義や資本主義はここから出発している」と語った。FRELIMO の主張はこれとは異なっている。「我々は個々ばらばらに生産している、しかし我々は今や集団的生産を目指して活動している——これが一般的目標である」。この集団化の好例は FRELIMO の商業部門で忙しく働いている二人の責任者が我々に提供してくれた。彼らは我々を伴なって旅に出発した。彼らが最近取り組んでいる仕事は、これから訪

れようとしているテテ地区に多くの「人民商店」をつくることであつた。しかるに、私が特に心ひかれたのは、部落において生産関係の変化が生じはじめたことであつた——これは、おそらく、私が隣国タンザニアにおける集団化地区の発展を研究してきたためであろう。以前の論文を引用すれば、「私は、集団的に耕作される農場において相当の部分を共同化している労働の配分、つまり収獲物の偶然的分配に対して部落の台帳に登録されている農場での作業を見出した。部落で当初、小事業主として仕事をしていたが現在では集団労働部門で働き、その労働時間が部落の台帳に記載される鍛冶屋や籠屋に会つた。このようなかで生まれた共同体精神は、部落民が上記の幅広い責任を引き受けるのを容易にしているようであつた——収獲物を提供したり、時には国境から生活物資を運搬して戦闘部隊の活動を手伝う。簡単にいえば、これはタンザニアにおいて知られている多くの「ujamaa vilage」と好意的に比較して得た経験であつた。ここでもまた、種々の搾取に抵抗してよく組織され、また意識的に活動している農村では、独立獲得後においても、モザンビーク革命の一連の前進的傾向の保障が予想されうるだろうことは事実からみて証明されるだろう。

除々にではあるが、解放区滞在中に、新モザンビークの将来図が我々に明らかになつてきた。それは「発展途上の」革命的社会の将来図であつた。我々が目にする地上での勝利は今だに首尾一貫した思想にまで高められていないことは過去の場合同様に真実である。なるほど、FRELIMOの勝利への推進力の一翼を人民党が担っている。だから、マポテ自身、我々との話しのなかで、社会主義的用語の使用を明らかに避けていた。しかるに発展の方向は運動の実践のなかで充分明らかになつている。それは急進化の過程であり、FRELIMOの責任者の手によって徐々に公式化され、またモザンビークの大衆にも徐々に理解されてきている。

「搾取」、エリート主義と企業家の危険性、最も基本的な民主主義の必要性への強調、それもロシア、朝鮮、中国、スカンジナビア諸国で

のいろいろな発展の成果を取捨選択した上で——このような話題がモザンビークでは食卓の会話の材料であつた。確かに、幾人かの左翼人——自己の理論的抽象の世界では確固不動であるが——は、真の革命の立証する曖昧な目的に幻滅を感じるであろう。それにもかかわらず、アフリカ南部の現状の維持者には、このような発展過程が人民に非常に大きな望みを懐かせる、つまり彼らの立場からみれば非常に大きな脅威となるだろう、ということを知っているように我々には思えた。

だから、後者——現状の維持者——について FRELIMOは何ら幻想を懐いていないことは重要である。運動論のなかで最も理論的に深化している点は反帝国主義論であることからも明らかであろう。モザンビーク内で頻々と我々が耳にしたのは、敵はポルトガル人民ではなくポルトガル政府でありその植民地主義的政策である、白人ではなく帝国主義的体制である、という言葉であつた。人種差別主義や超民族主義の日和見主義的汚名は不断に糾弾され、新植民地主義の危険性は広く人々の間で討論されてきた。このコインの裏側もまたひときわ目立っていた——崇高な、我々に感銘を与える国際主義がそれである。解放地区のいたるところで我々の受けた歓迎ももちろんこの証しとなる。世界的規模での人種抑圧と北アメリカ帝国主義の生々しい現実にもかかわらず、白人でありカナダ人の私が仲間として温かく歓迎されたのは感銘深かつた。しかもこのような歓迎はまた、主要国のなかでも進歩的な国がこの信頼と友好に報いるためアフリカ南部で如何に行動すべきか、その方法について私の理解を深めるところともなつた。

III

本年（一九七四年）一月、私はタンザニアにおいて、ソマリア訪問を成功のうちに終え、モザンビーク解放区への帰路を急いでいた

FRELIMO 議長サモラ・マツケルと会談する機会に恵まれた。私がモザンビーク訪問を終えて十六ヶ月も経ない内に、劇的な軍事的優位が達成された——ローデシアからマニカヤソファラを経て海外へと延びる危険な大動脈への攻撃の成功の例にみられるような優位——、こ

のような優位は今日では南アフリカの新聞でも広く報道され、ポルトガルにおけるクーデターの火種ともなった。私はサモラにこれらの成功についてまず話してくれるように要請した。しかるに、彼が自由モザンビークの今後の社会的政治的統一を強調したのには驚ろいた。かようにして、一九七三年中、数多くの FRELIMO 全体会議が開催され、国家建設の重大な諸問題——教育、医療、生産、女性の地位の問題（後者の会議には FRELIMO の女性幹部八〇名が参加した）の討議にあてられた。国内の主要軍人達が、「イデオロギーの明晰化」のため幅広い努力をしている人々の運動を支援する目的で開催したカボ・デルガド八月集会についても、サモラ・マツケルは語った。そこでは特に政治活動の方法論が主要テーマであった。彼は三点、「政治路線の一般化」、「活動方法の民主化」、「指導体制の集中化」を主張してこの集会の話を締め括った。一九七二年に私の目にした実践はその後 FRELIMO により一層すっきりと理論化され一般化されつつあることが明らかであった。

もちろんこのような優先の順序付けは驚くにはあたらない。右に述べてきたように、FRELIMO の力の一端は、全く文字通りに政治は命令のなかにあるという事実であった。つまり、大衆の参加と、責任と信頼の指導体制との共存の実現が運動成功の中心的課題なのである。またこの共存が、次に、軍事的達成を前提とする。この現実の上に、FRELIMO は現在のように悔りがたい存在であり続けることが可能となる——今では運動はポルトガルとの交渉を勢力的に展開している。解放区という枠を超えて活動しているモザンビーク人は、この国における純粋な革命という解放運動側の公約に大いに責任がある。これは驚くに価しない。これらは積極的兆候である、だが I において我々はポルトガルのクーデターの余波を受けてアフリカにおける短期的分裂を予想し、警戒を要する別の要因を考察してきた。確かに、以上のような未解決の状況下では、ポルトガルの新植民地主義との闘争支援の必要性は今後とも緊急事であり続けるだろうことは明白である。

さらに、不吉なことに、ベトナム戦争勃発の際の事件の捏造を思い起させるアフリカ南部の現在の諸情況は、この国での闘争継続のため、急激な高まりをみせている左翼への関心を特に浮き彫りにしている。ここでは本論文の論点を再確認するだけに留めておきたい。アフリカ南部の不安定な情況の真直中で、先例ともなるべき純粋な革命のために努力を重ねている FRELIMO を支援することが我々の責務である。これを最少限確認しておきたい。

後記、八月一日

この論文の脱稿後二週間（七月中旬）の間に、ポルトガルとモザンビークでの情勢は既に変化してしまったように思える。議会の両翼での対立——一方はスピノラ將軍に指導され、他方は AFM に指導されている——のなかで、勝利を手にしたのは後者であり、当分の間それが続くであろう。新しい中道右派内閣を推進してきたスピノラ將軍の努力は短命に終り、代って、中道左派集団が新首相コロネル・バーゴ・ドス・サントス・ゴンサルベスの指導の下に政府内での足場を固めた。^(十三)この展開の論理をはっきり認めて（そして、疑うべくもなく、ポルトガルが FRELIMO を政治的に軍事的に馴化することが全く不可能であるという付随的事実を認めて）、スピノラは七月七日国民に向けて発表した、そのなかで従来ポルトガルのなしてきた如何なる提案をも超えた方式、植民地の完全な独立権の保障を提案した。確かに、これは意義のある前進である。しかるに、不吉なことに、未だにスピノラやその他の者が心に描いている独立への移行措置の詳細が明らかにされていない。加えて、右に討論してきたその他の危険も今だにそのままである。それらの危険が特にアンゴラにおいて脅威となるであろうことは真実である——そこでは国際資本主義がさらに一層大きな脅威となろう。しかも解放勢力は無残に寸断されている——FRELIMO にとっても、嚴重な警戒が日常的になってくるだろう。だが幸運にも、右に考察して来たように、FRELIMO は今後数週間内、数ヶ月内に姿を表すだろう複雑かつ巧妙な挑戦者に充分対処出来るであろう。

註

1、例えば、ボウヤー・ベル著「ゲリラの神話」、サブタイトル「革命理論と誤まれる実践」を参照。ベルの著書にはアフリカ南部に關し不快で誤った一章が入っている。

2、国軍運動参加のある将校はこれ——社会主義者さらにはマルクス主義者——よりも一層左翼だとの風評がある。

3、もちろん、新植民地主義の鑛の本質に關して活動家の間で意見が若干異なる——ポルトガル人がポルトガルとの間に可能な限り多くの關係を維持するのに腐心すればする程、國際資本はそのような要求にます／＼冷淡になる。

4、FRELIMOはGUMOやその他の者を通して民族的反感の操作の獲得に成功したようであった。だから、運動に対するマクアの敵意を誇示しようとする謀略（買収された會長を代理人にして利用する）は、マクアがナンプラで強力なFRELIMO支持を表明するため大声をあげて示威運動をした時に破綻した。

5、ガバン・ヤング筆、「スピノラは、FRELIMOが最高の切り札を持っているのに気付くだろう。」「オブザーバー」（一九七四、六、三〇）。不幸にして、ソアレスと彼の主張ですら、これまでのところ、解放運動への直接的権力委譲よりもむしろ選挙による方法とこの類のものにあまりにもふりまわされてきた。

6、拙著「新植民主義と解放闘争」、R・ミルバンド、J・サビル共編「社会主義者登録簿、一九七三年」収録論文「ポルトガル領アフリカ植民地からの若干の教訓」参照。

7、私はテテへは、モザンビーク・アンゴラ・イギリス領ギニアにおける解放委員会（CFMAG）の三人の同僚と旅行した。FRELIMOは我々が二年程以前に訪れたことのある地区を解放するのに懸命に戦闘していた。我々はその地で最も印象的に思ったのは、社会的政治的・下部機構の行動基準の作成であった。我々が到着した時まで、ポルトガルはこの地区にほとんど足を入れることが出来なかった。それも一

揆とか短期間の攻撃のためにジェット機やヘリコプターによってしか出来なかった。

8、マボテにとつては、政治的に動員されなかった兵士は弾をぬかれた銃のようなものであった。あるいは一兵士（逃亡して来る以前にポルトガル軍で非選抜者として従軍していた）がそこでの任務とFRELIMOの活動とを比較して、その当時、私は真直前方をみるだけで、傍を見ることが出来なかった」というのと同じことであった。

9、モザンビーク内で革命基地をつくるために農民と幹部との間で交された対話の詳細な分析を知るには、拙著「アフリカにおける経済の展望」の一章、特に四節を参照。

10、前掲書。アフリカの農民を基礎に置く革命の集団主義的構成の問題は別なテーマで論じられるべきである。

11、特にそれはサモラ・マツケルの演説のなかで明らかにしている。FRELIMO議長の演説選集の編集は、モザンビーク、アンゴラとギニアにおける解放委員会の手で間もなく出版されよう。

12、これら発展の興味深い分析はマルセル・ネーダーギヤング著の「ポルトガル——民主化のための息つき所」。ザ・ガーディアン・ウィークリー誌のル・モンド誌よりの転載。

13、同様なことがギニア・ビザウ共和国のPAIGCのためにも語られた。アンゴラの複雑な様相に關して詳細な分析が必要となろう。ここでは不可能である。

（ジョン・S・ソールはマンスリー・レビュー社出版の「アフリカ経済論」の共同執筆者である。彼は現在ポルトガル領アフリカ植民地解放トロント委員会と共に活動している。またカナダの左翼誌「デイス・マガジン」の編集者でもある。）

(Monthly Review, Sept. 1974) (岩田 英世訳)